

# かたりべ 21

豊島区立郷土資料館だより



## ひなまつり

雛祭(桃の節句ともいう)は、ご存知のように、三月三日に女の子のいる家で、雛人形や調度類を飾り、甘酒・菱餅・桃の花などを供えてわが子の幸福を祈る行事のことをいいますが、今日のような雛祭になったのは、江戸時代後期以降だといわれています。

雛という名は、平安時代に貴族の子女の間で日常おこなわれていた「ひいな(小さな人形)遊び」からきたもので、今日のままごとのようなものでした。またこの当時、上巳(三月の初めの巳の日)の節句といって、紙などで作った人形にけがれや災いを移して川や海に流す行事が行なわれていました。このひいな遊びと上巳の節句とが結びついて、今日の雛祭に発展していったといわれています。雛人形も紙製の立ち雛から、江戸時代末期には雛段を設けた内裏雛へとかわり、最近では核家族化と住宅事情の変化により、ケース入りの雛飾りが登場するなど雛祭の様相も昔とは大きく変わってきています。

上の写真の内裏雛は、池袋本町二丁目在住の佐々木由紀子さんより寄贈されたものです。昭和二八(一九五三)年に長女が産まれた時、由紀子さんの母から贈られた七段飾りの雛人形で最近まで毎年飾っていたそうです。

'90年度企画展

## 池袋の生活資料展

池袋ちよつと昔のくらし

3月1日(金) ～ 3月30日(土)

今回の企画展「池袋の生活資料展」は、昨年十一月に実施した、池袋地区（池袋本町一丁目、上池袋二丁目、東池袋一丁目、池袋一丁目四丁目、西池袋一・三・五丁目）の「歴史生活資料所在調査」の際に寄贈を受けた資料を中心に展示しています。

池袋地区の歴史生活資料所在調査は、当初の予想をうわまわる成果を得ることができました。その成果の一つは、生活資料そのものの残存状況です。

今回の調査区域は、その大半を一九四五（昭和二〇）年の空襲で焼失し、また、戦後の急激な都市化によって、その生活環境が著しく変えられていった地域です。また、戦後になってから、大変多くの人々が移り住んだ地域でもあります。

したがって、当初の予想では、調査対象の中心をなす戦前・戦中の資料はもちろん、一九五〇年代後半までの生活資料さえも、はたして残

存しているかどうかも心配の種でした。

しかし、いざ調査に入ってみると、この心配は杞憂におわり、多くの歴史生活資料の存在を確認することができました。

なかでも、意外なことに、戦前から使用していたというものが予想以上にありました。所蔵者の方の話の聞いてみると、以前住んでいた場所で焼け残ったものを、池袋に来てからも使用していたとか、戦時中に疎開していた時にも持っていたとか、その残り方もさまざまなようです。

このようにして残されたものを目にした時、年代や暮らし向きを特定する形では無理にしても、高度経済成長を遂げる以前のくらしを知る手掛かりになる展示は可能なのではないかと、ということになりました。

今回の展示の企画はこのような考え方から出発しています。

展示は五つのコーナーから構成されており、

池袋東口のヤミ市で傘とはきものを売っていた三桐商店の前にて。昭和23年頃撮影。（加藤哲司氏提供）



それぞれ、「プロローグ・戦後のくらしとヤミ市」、「台所・つくる」、「部屋1・つどう」、「部屋2・やすむ」、「エピローグ・くらしの周辺」としました。

第一のコーナーでは、戦争直後の生活と密接に関わり、戦後生活の出発点となったとも考えられる、ヤミ市の関係資料を中心に展示をしました。

このコーナーには、歴史生活資料所在調査で見つけたヤミ市の路地の写真があります。これは、当時の様子を窺い知ることのできる大変貴重な写真で、飲食店や衣料品店の看板がみえるほか、ヤミ市の建物の様子もかなり詳しくわかる。今回の調査の大きな成果の一つです。

二番目のコーナーは、台所空間をイメージした展示をしています。

このコーナーの中心をなす展示資料は、冷蔵庫と竈（かまど）です。現在のように、生活のエネルギーが、ガスと電気を中心とするものになる以前、煮る・焼く・炊く、という行為は炭や薪による火力を利用していました。また、ものを冷やす場合でも、直接水を使う構造のものであったことが窺えます。

次のコーナーでは、家族が集まり、語らい、食事をしたり、作業をしたり、遊んだりする空間をイメージしたのになっています。

ここには、火熨斗から電気アイロンにいたる、着物のしわをのばしたり、型をつけたりする一連の道具も、炭火から電気へとという過程を経て



コロムビアポータブル蓄音機。ゼンマイ手廻し式で昭和12年に購入したもの。(小林義雄氏寄贈)

います。また、電気が娯楽用品にまで普及する以前のものであるゼンマイ式の手廻し蓄音機もわたしたちの予想以上の大きな音をだします。

その隣のコーナーは、くつろいだり、休んだりする空間を考えた展示を試みてみました。

冬の暖をとる火鉢、置き炬燵など、やはり炭火を利用したものです。また、整髪用のコテも炭火で熱して使用したといえます。これらも現在では電気をはじめとするエネルギーを利用したものに取って代わられています。

最後のコーナーでは、直接普段の生活にはかわりのないものですが、人々の信仰や習慣、そして、移り住むことに対する思いなどを知ることがかりになるようなものを展示しました。

大変残される可能性が低い、富士講や七面山講の行衣や、善光寺参りで手に入れた血脈草履などの資料や、「土用三郎」と呼ばれる火傷に効くといわれる雨水など、珍しく貴重なものが多くあります。

また、池袋に移り住むとき、故郷から持ってきて大切に保管されていた農事祭礼の道具もみわかりました。

以上、簡単に今回の展示の概要を述べましたが、この企画展に展示されている資料をみて、以前に見たことがある、なつかしいとか、またガラクタばかりじゃないか、などいろいろなこ

感想をお持ちになるかと思えます。

しかし、これらのものは博物館の資料となるとき、それらの感想を持つだけでは看過できない重要な意味を持ったものになるのです。つまり、現在土の中から掘り出される土器をはじめとする出土遺物と同様に、次の世代の人々にとって、それぞれの時代の、人々のくらしや、生活環境の変化などを知る重要な手がかりになるのです。



第17系統（池袋—数寄屋橋間）の都電。現在の東池袋1-1付近からグリーン大通りを撮影したもの。(加藤哲司氏提供)

〈刊行物のおしらせ〉

『豊島の集団学童疎開資料集(2)日記・書簡  
編II——長崎第五国民学校(その1)——』

この資料集には長崎第五国民学校(現・千早小学校)から福島県に集団疎開をした姉弟(三〜四年生と二年生)と東京に残った家族たちとの往復書簡一七〇通を中心に構成されています。第二次大戦末期、本土空襲をのがれて都会の子どもたちは親とはなれて地方に移りました。家族はバラバラになって一年余の生活を送ります。その間に東京は空襲にあり、豊島区も大半が焼けてしまいました。

母から娘への手紙の一部を紹介します。  
(「ちづ子」は娘、「庄ちゃん」は産まれたばかりだった弟。)

○「校長先生は、なるべく行かないやうにして下さい、とおっしゃいましたから。こちらからはだれも行かなくても淋しがってはいけませんよ」

○「もう顔を忘れたでせうね。庄ちゃんもちづ子さんを知らないでせう」

○「三せん切つては、今売っていないのであとから送ります……ぬりゑも今はありません」

こうした手紙の他、子どもの疎開日記、献立表、そして手紙や日記にはけっして書けなかった疎開生活の一端を記した学童の回想録が収録されています。この資料集から、学童疎開とは、戦争とは一体何なのか、考える材料を見出しただけだたらと思います。



ちづ子の日記帳

『豊島区地域地図 第4集  
——近現代(陸測図)編——』

今回の地図集では、大日本帝国陸地測量部が作成・発行した一万分一地形図東京近傍のうち、一九〇九(明治四二)年に測図された地形図をはじめとして一九一六(大正五)年第一回修正、

一九二二(大正一〇)年第二回修正・一九二九(昭和四)年第三回修正・一九三七(昭和一二)年第四回修正の五点、および一九四七(昭和二二)年に日本地形社が発行した戦災復興期の東京一万分一地形図、建設省地理調査所発行の一九五六〜五七(昭和三一〜三二)年第五回修正の二点、計七点を収録しています。複製にあたっては、豊島区域に該当する六点の地形図をはりあわせて一枚の地形図を作成しました。

一万分一地形図東京近郊は、日本最古の一万分一都市図であり、この地形図からは、明治期東京の近郊農村であった豊島区地域の都市化と戦災被害の具体的なようす、戦後の驚異的な復興ぶりを容易に読み取ることができます。これまでに刊行された地図集とあわせて、地域史を研究されている方々や小・中学校等の社会科教育・地域学習に役立てていただければと思います。

(資料集は一五〇〇円、地図集は八〇〇円で三月下旬より販売する予定です。)

かたりべ

No.21

1991年3月3日  
発行

豊島区立郷土資料館

豊島区西池袋2-37-4

電話03-3980-2351